

小説の読後感情の個人差に読書中の認知的評価が及ぼす影響 －小説検索システム設計の基礎研究－

文化創造専攻 図書館情報学専修

20001ALM 牧野 豪人

修士論文要旨

本研究は、小説を読んで生起する感情の認知モデルを対象とした小説検索システム設計の基礎研究である。その主題は、個人差を伴う読後感情の生起モデルの構成概念として、「共感性 (empathy)」と「認知的評価 (cognitive appraisal)」を仮定し、個人差を伴う読後感情の生起モデルを実験的に検討することである。

第1章では、研究背景として、近年、読者の小説選びを手助けするために、感情という主観的な視点からの索引付けを試みる小説検索システムが設計・開発され、英国の whichbook.net のような実用化されている検索システムも存在している。しかし、現行の小説検索システムには、読者の生起する感情の種類やその程度には違いがあるにもかかわらず、読者の平均的な感性モデルに依存した検索アルゴリズムが採用され、読者の感情の主観性が考慮されていないことを問題の所在として示した。このような背景に基づき、読者のパーソナリティ特性である「共感性 (empathy)」が「認知的評価 (cognitive appraisal)」に機能することで個人差を伴う読後感情が形成されるモデルを仮定し、そのモデルの妥当性を実験的に明らかにすることを研究目的とした。

第2章では、心理学における先行研究のレビューを通して感情の概念について考察した。具体的には、基本感情説、感情の次元説、感情の概念、感情と認知、感情生起のプロセス、読書行為における感情として主人公の感情と読者の感情について概観した。

第3章では、読者のパーソナリティ特性である共感性について考察した。ここでは、共感性が喚起されるメカニズムや共感性と感情との関係性について概観し、共感性を「共感的関心」、「個人的苦痛」、「視点取得」、「ファンタジー」の4つの次元で捉える考え方を示した。

第4章では、Arnold (1960)、Roseman (2001)、Scherer (1999)、Lazarus (1991)らの提唱している「認知的評価理論」と物語理解における認知的評価について概観し、読者は物語を理解しながら主人公の気持ちや状況を推論することで、共感、予感、および違和感という認知的機能が促進され、その評価から読後の感情状態が形成されるというプロセスを示した。

第5章は、実験である。実験では、読者の共感性、読書中の認知的評価、読後の感情状態の3つの構成概念の観測変数を設定し、それらの変数間の関係性から仮説モデルの妥当性を検討

した。なお、刺激として物語の文章理解が深まり易い短編小説2点、物語の理解が深まり難い短編小説1点を用いた。

実験の結果、物語の理解が前提条件として成立すれば、一部の尺度に限定はされるが、読者の共感性と認知的評価、認知的評価と読後感情のそれぞれの変数間に統計的に有意な関係が認められた。

最後に、第6章では本研究の考察と結論を展開した。本研究の課題として、サンプル数の不足から共分散構造分析のような手法を用いて3つの構成概念間の因果関係を考察できなかったことを示した。また結論として、物語の主人公の理解が成立して読者の認知機能を促すことで、パーソナリティ特性が認知的評価に影響を及ぼし、その評価の個人差のスタイルが読後感情の個人差と結び付くという認知モデルの妥当性を示唆した。